

医療維新

シリーズ 「医学部卒業後10-15年目の医師たち」～JCHO編～

医療維新

“フリーランス医師”も視野、離島経験でプライマリケアの面白さ実感

医療のAI時代も見据える卒業後8年目医師の奮闘 -テーマ1「病院総合医」Vol.4-

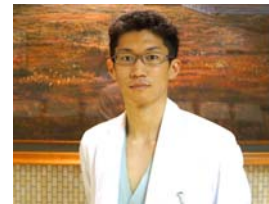
オピニオン 2018年5月25日(金)配信 JCHO中京病院 小林 正宏

JCHO尾身理事長が語る「テーマ1『病院総合医』」はコチラ

小林 正宏 Masahiro Kobayashi
JCHO中京病院

【略歴】東京都出身。2010年3月横浜市立大学医学部医学科卒業後、東京厚生年金病院（当時＝現JCHO東京新宿メディカルセンター）で初期研修と、後期研修を修了。2012年4月からは後期研修と併行して伊豆諸島の新島村診療所での勤務も始めた。2015年にJCHO東京新宿メディカルセンターへ名称変更後も内科医員として所属し、新島村診療所での勤務も継続。2017年にはJCHO東京新宿メディカルセンターのほか、JCHO宇和島病院、JCHO登別病院でも勤務。2018年4月からJCHO中京病院。

【所属学会・取得資格等】日本呼吸器学会所属、日本内科学会認定内科医、日本プライマリケア連合会認定医、日本医師会認定産業医、緩和ケア研修修了



現在、JCHO版「病院総合医」プログラム（以下、JCHO版プログラム）の1期生として、昨年度から色々な病院を回らせていただいている小林正宏です。当企画では、病院総合医以外にも様々な視点で、JCHOグループ内の多様な働き方を紹介するのですが、私はJCHO版プログラムを通じた経験などを書こうと思います。これをお読みの若手医師の皆様が、今後を考える一助になれば幸いです。

都心の病院勤務と数カ月の離島・診療所勤務を交互に

私は、東京厚生年金病院での初期研修を経て、JCHO東京新宿メディカルセンター内科に所属。2014年度からJCHOの地域医療事業として3年の間に延べ1年以上、伊豆諸島の新島村診療所に勤務しました。この際の派遣は、JCHOが発足したばかりで、へき地医療への支援を積極的に行っていたということから始まった事業でした。内地のJCHO病院に勤務しながら、数カ月単位で新島村診療所に赴任するという勤務形態を取っていました。新島村派遣中には、内科から整形、小児科などのプライマリケアはもちろん、維持透析や、生命に関わる救急患者を内地でヘリ搬送するまでの初療、訪問診療、学校検診など、色々なことを経験しました。自宅で死亡した方の死体検案や、サーフィン中に溺水し引き上げられた人を、浜から病院まで運んだこともありましたが（ちなみにその方は助かりました）。よろしければJCHOホームページ内の記事などもご覧ください（JCHOのHPにある記事は、「東京新宿メディカルセンター」と「診療分野の幅を広げる絶好の機会となる離島経験」）。

このいわゆる離島・へき地での診療体験で、分野を問わずあらゆる疾患に対応するプライマリケアの面白さを知りました。実際にへき地で診療していると、一般内科をはじめ、整形外科、皮膚科、小児科などの需要が高く、こうした領域について研修し直せる機会があれば、島で得た経験をより補強できるのではないかと考えました。また、自分は医局に所属しておらず、新島以外では初期研修から同じ病院に長く勤めてきましたので、違う病院での経験も積みたいと思っていたところにJCHO版プログラム開始のお話を頂いたとき、目的にも合致していると感じ、参加させていただくこととしました。

自由度高い研修プログラムでさまざまな経験蓄積中

現在所属しているJCHO中京病院は、愛知県名古屋市の海側に位置する病床数663床、名古屋市南部から知多半島の一部に至る地域の急性期医療をカバーする総合病院です。5疾病5事業を中心として、特色の小児心臓外科や熱傷センターなどは、全国的にも有名です。

私は今、皮膚科で研修中です。当院の皮膚科はJCHOグループの中でも常勤医が7人と多く、特に膠原病領域に強いことで有名です。一般皮膚科疾患から、膠原病の合併症管理まで、アクティブに診療しています。

なお昨年度は、JCHO東京新宿メディカルセンターをはじめ、プログラムで必修となっている地域病院研修として、JCHO宇和島病院（愛媛県）、JCHO登別病院（北海道）に勤務しました。後2者は、都会の大病院とは異なり、いずれも内科の常勤医師が数人という規模の病院であり、直近一年の間に、かなり幅のある職場環境に身を置かせていただきました。

医学部卒業後6年目以降の医師が対象のJCHO版プログラムは、きわめて自由度が高く、こちらが要望すれば、極力希望に沿うように本部で病院間の都合を調節していただけます。また転勤時の転居費や、東京で行われる講義形式での

スクーリングに参加する際の旅費なども“病院持ち”となっており、(おそらくは予算的にも)JCHOグループが力を入れている事業です。医局に所属していない方、また医局や前職を辞めて次のキャリアを考えている方、やりたいことが明確にある方にとって、お勤めできるプログラムであると考えます。一方、まだ開始したばかりであり、各病院とも、研修内容については試行錯誤の段階にある点は課題が残ると感じております。

経済のシュリンクやAI登場で“広く浅い”総合診療医にアドバンテージ

JCHO版プログラムでの研修が修了する1年後以降は、当面の間、JCHOグループに所属して勤務する事を考えていますが、10年、20年後のキャリアについては、予想困難であるというのが正直なところです。日本は今後、少子高齢化の進行により、確実に人口、経済がシュリンクする“撤退戦”に入っていきます。医療界もその流れから無縁ではなく、今後10年単位で日本の医療をとりまく状況は大きく変わっていくと予想します。厚生労働省の最近の試算では、2028年には医師の需給は均衡し、2040年には供給が需要を3万人も上回るとの見通しを示しています(実際にどこまで当たるかは分かりませんが)。少なくとも年金受給金額の引き下げや、社会保障費の減額は今後確実に行われると考えられ、医師であれば誰もが平均的に高収入が期待できるという時代ではなくなるでしょう。また、AIが医療現場に導入されることで、医師に求められるスキルというものも変わってくる可能性があります。

予測困難であると断った上で、完全に私見の予想ですが、そうした時代に求められる医師とは、一つには、AIにデータを学習させるなど新たな知見を研究する側にいる、一握りの専門家ということになるでしょう。また、機械がそう簡単に再現できない外科系の手技は、今後も価値を持ち続けるのではないかと思います。一方、例えば画像診断などをはじめとして、診療補助AIの発達で、非専門医と専門家のスキルの差が少なくなることで、あらゆる領域を“広く浅く”知っている総合診療医にアドバンテージが出てくるかもしれません。

医師もこれまでより競争にさらされる困難な時代になっていきそうです。これと決めた領域を極めるか、あるいは医師の不足している地方に行く、他の病院が休診している休日や夜間の診療を専門に行う、など、参入障壁を逆手に取った色々な戦略が考えられます。そうした時代には、米国では一般的とされるフリーランス的な働き方の医師が有利となる場面もあるでしょう。

いずれにせよ、世の中の流れの変化を見てその都度対応していくしかなく、そのために現在できることとしては、医師という職業が比較的恵まれた立場にある現在のうちに、有形無形の資産を築き、世の中がどのように変わっても生活していけるように備えることだと思います。JCHO病院総合医プログラムの内容は、どちらかという、医局に所属せず、上記のフリーランス的な生き方を志向する方が、多様な経験を積むという目的に合っているように思います。



JCHO中京病院前で

シリーズ [「医学部卒後10-15年目の医師たち」～JCHO編～](#) »